同人作品

カマキリ　　秋山義仁

口付けにあたしは必死あなたの背に手を回しとんでく自分をつなぎ止めていた
合せてぞ一つになりぬ主と妾昔のままに何も変らず
何処がいいあなたの所何食べるあなたを食べる毎日食べる
空に見る色めく秋の果物の朝日するりんご夕陽する柿
蝉の声木々の間にはさまって色は移ろう妻恋の唄
君探す君が生れしこの津軽昔のままに雪の中
目のないもぐらみみずになめくじ時々道超え大旅行想夫の唄
霜月の朝は遅い月に沈まずカマキリは鎌を上げ太陽はさむ

今日も又ベンチに一人無人駅誰を待つのか明日も待つのか
時を超え出迎えし君の髪白くしわ深く僕と同じ夢
糸垂れる女の側で影を釣る孤独漂う若い釣人

恋もたそがれ　　石邉綾子

毎年の便りも途絶えウナ・セラ・ディ巷に消えてしまったかしら
振り向きもせずに強気の青春はポニーテールにピンクのりぼん
口ずさむハーモニーは校庭に低く沈んで宵の明星
灰色の馬が天から降りてきてリズムを刻むロシアのあたり
コロナ禍に人混みの駅しかたなく利用している生業ゆえに
地下鉄を乗り継ぎ深く潜り込みりんかい線はくじらのお腹
東雲にくじらの腹から泳ぎ出る電車に乗って湾岸をゆく

作業者の調査のために健診の旅は続くよ東へ西へ

令和四年　　井上省吾

手の中に物をつかんで放さねば大切なもの獲るもかなわず
やることを後回しせず片付けて気持ちすっきり次の事まつ
気付くこと思い悩んで後回し溜り溜って頭いっぱい
失敗を恐れてやらず終るより気がついたこと手際よくやる
すぐやって何時でもすぐに次のこと何が起きよとおちついて待つ
あれやこれすること多く気が重く何からするか何も手つかず
寒い朝窓から見える霜柱野原の草も白一面に
冷凍のおせちを出して解凍し新らしい年すばらしき朝
甘いもの手元にあればいくらでも食べてしまうと買うこと控え

誰がやる我動かねば始まらぬ気付いた事をどんどんこなす
天気よし洗濯をして天日干し有難きかな自然の恵み
生活はローンを組まず現金で今あるだけで計画たてる
思いきり空気を吸って陽をあびて自然の恵み身体一杯
ゼンマイを巻いて動かす古時計今も元気に時刻む
青空に光をあびて飛んでいく窓から見えるあれは飛行機
暖房をつけずに過す部屋の内日だまり見つけああ幸せだ
西日浴び赤くそまったもみじの葉硝子越し見る冬の訪れ
風呂の湯を洗濯槽に汲入れて節約をするＳＤＧｓ
窓越しに赤黄緑と色がつき紅葉の葉っぱしばし見とれる
爽やかな紅葉を見る窓際で一人静かに陽を浴びながら
たっぷりと陽の光浴びふっくらと丸い布団が身を包み込む

布団干し叩く音する耳にして我家も負けずホーキを持って
洗濯機分解をして水洗い汚れがひどく悪戦苦闘
洗い終え綺麗になった洗濯機安心をして洗い物する

ダム湖の花　　**熊谷恒樹**

トンネルを抜ければつづく花の道水量少ないダム湖を巡る
山峡のダムを縁どる様に咲く千本桜いまだ散らずに
石垣や道路の跡もそのままにかつての暮しダム底にある
この中に一本だけあるみどりの桜目立たぬままにひっそりと立つ

シェフレラ　　**甲村雅俊**

シェフレラの茎の長きの二鉢を冬に買ひたりさみしき冬に

冬になり怺へられなくなりたるか飼ひ猫死にたる後のさみしさ

さみしさを三十一文字にしるすなら温もりなくてつづく生活

生活に潤ひもたせたくなればブルーミーとふ花のサブスク

サブスクで音楽を聴く最新のヒットチャートとわれの懐メロ

メロディの流れのごとく美しく立居振る舞ひあるべし老いて

老いてなほ我執がりがり大衆はほとけの教へを遠く離れて

離れたる人に手紙を書くときの万年筆をひとつに定む

定まらぬ信心のまま念仏をとなへるわれを助けましませ

助からぬ身ゆゑ帰依すとのたまひて自暴自棄とも紙一重の差

差別とは区別のことと看破せる智慧のことばの清々しさよ

清やかな朝の風吹く公園をスマホ片手に散歩するなり

散歩するわが行き先は早暁にコサギの舞へる小池公園

公園に住み着きてゐる猫のごと暮らすわが身の行く末である
行く末は猫に追はれてぶんぶんと出口を求め飛び回る蠅
蠅の飛ぶ五月連休わがひとり部屋にこもりて歌をまとめる
まとまつた相談ごとを一つづつあとまはしせず実行するか
実行のキーをぽんぽん叩いては身を乗り出してパソコン作業
作業する物音しばし響くとき田舎暮らしを切にあこがる
あこがれてゐた仏教と思ひつつ静かに両手あはす仏壇
仏壇に向かひて朝のお勤めをつづけてやがて一年になる
一年のあまりに早く過ぎたれば日記のファイル次々増える
増えてゆく観葉植物わが部屋に十鉢を超えここで打ち止め
打ち止めのパチンコ台をあとにする勝者のごとく席を立ちたる
立ちながらテキストを読む日日にして少しは鍛へられし足腰

越路とか越の国とかいふ越は北陸道の古称ださうな
古称ではみな美しき日本語をあまり知らねば引く字引なり
字引のうちわが持てる『常用字解』読む辞書として面白いよと
面白きドラマばかりをみてをれば余暇を過ごすに金のかからず
かかりたる罠をぶらぶらぶら下げて森の深くへゆくけだものは
けだもののごとく行くなりときをりはほほに掠れる森のシェフレラ

夏への扉　　**浜谷独人**

そのドアを開けば夏だね君はまだあの本の中にいるのだろうか
「昨年の夏行きスーパー快速」は乗りそこなった寝坊したので
無限回繰り返された絶望に「無限と一度」の希望を添える

さくら散る　　氷室敬子

さくらちるさくらさくらことし最後と思うほど愛しみのことば我にきかせよ
愛犬にさくらと名づけし石邉さんこの時期きっと胸に帰りくるらむ
空気ぬきバランスボールちぢませてすわりごごちよい八十齢
さくら道仕事にて行く君の背高く見上げて話す今がすき
夏みかんスッパイのをいかにせんと案ずるに夫はすんなりはちみつにつけた
若くして死んだという君も逝き私の胸はカラカラとする
いつからか八十齢を待っていたなぜかわからぬ予知能力

さくらのように（「短歌往来」五月号より）

若きまま死んだという彼も逝きあの夜のことはすべてまぼろしか
いちどだけかなしみの言葉きかせんか花びら散らすさくらのように
魅きつけてゆさぶりやめぬ青あらしわが額を焼く烙印を押せ

ふかぶかと抱き合う姿態くら闇の身のおくひだに届きしを言う
まなうらに白く花のふぶくゆえ激しくわれもからだゆさぶる
ああせめて快楽の呻きあげて果てよ檻をやぶりし獣のように
うなだれて覚めていくべしほのじろく小雨にぬれて都市は明るむに
なまぬるき水の重さにゆらゆらとシーラカンスも記憶しずめる

フリージア　本田洋子

カラカラと枯れ葉転がす北風は団地の乾いた道を走りぬ
一羽二羽カラス来たりて公園のフェンスを伝い仲良く歩く
シュロの葉は寒さにめげずワサワサと団地の庭を賑わせて居り
南無観音心あらば伝えてよ吾れ罪深く許され難きを
南無観音心あらば伝えてよいかに未熟な母であったか

十五度で桜開花す次の日は氷雨降る朝三寒四温

訳有りて今年は球根植えざりき脳裏に咲かそうフリージアの花

をちこちにほんのり灯る桜かな心の中をも照らしておくれ

花吹雪坂を登れば教会の屋根の見え来るバス停の先

夏待てず　　正木りえ

フランスへ旅立つ吾子の背を押して健やかであれ心も身をも

夏待てずあなたの元に駆け寄って告白を待つ今が青春

思い出もいつかは過去と呼ばれたるそんな日常流れて生きる

好きだから些細なことも分け合える笑って過ごす今が幸せ

春の嵐　　若杉ゆき

宇宙に旅出来る時血を流し隣国同士戦うのかな
コロナとの人類達の戦いのなか国と国との悲惨な戦い
争いを誰か止めてよ核ボタン握るプーチン狂気の国を
母ごころいくつになれば解るかな死ぬまでわからぬ哀しいけど
わが思い全てが無駄に間違いだそういわれてもまだ迷いあり
わがこころいつになったら落ち着くの平和が来るの死ぬまでこないの
人生の最終章想うように絵描くことまだ難しいかな